ウィルダネス幻想への抵抗――『ビッグ・サーの南軍将軍』における荒野の戦い

菅井　大地

1. はじめに

リチャード・ブローティガン（Richard Brautigan）の小説『ビッグ・サーの南軍将軍』（*A Confederate General from Big Sur*, 1964）は、カリフォルニア州のビッグ・サー（Big Sur）という土地が主な舞台となっている。[1] この作品では、ビッグ・サーという地域を背景に、自身の先祖に南軍将軍が居たと信じてやまないリー・メロン（Lee Mellon）という男と、その友人ジェシー（Jesse）との生活が描かれる。

この作品における、人里離れたビッグ・サーでの生活は、物質的な豊かさを享受していた当時のアメリカ社会からの逃避行動を髣髴とさせると指摘されている。Terence Malley や Tony Tanner は、ブローティガンはこの作品において、当時のアメリカ社会に対して悲観的な態度を示していると主張する。[2] また、Gerald Locklin と Charles Stetler によれば、文明の利便性から隔離された土地での生活を試みる登場人物たちは、「本能的にアメリカからの逃避を試みている」（72）とされる。ブローティガンの作品が、物質主義的なアメリカ社会を拒絶する、当時の若者文化に受け入れられたことを考慮すると、1964 年に出版された『ビッグ・サーの南軍将軍』がアメリカ社会からの逃避や、物質主義的繁栄に対する否定的な姿勢を表しているという解釈が妥当なものであったことは想像に難くない。[3]

また、リーの曽祖父 General Augustus Mellon が戦ったとされる「荒野の戦い」（the Battle of the Wilderness）を、ビッグ・サーをはじめとするカリフォルニアの土地において滑稽に反復するリーではあるが、彼の「戦い」は退却の色が濃く、「消耗戦」の様相を呈する。Marc Chénetier は、冒頭の“Attrition's Old Sweet Song”と題された章で示される「南北戦争における死因一覧表」に着目し、「消耗」（attrition）という語が鍵語としてこの作品に通底していると指摘する（23）。さらに Jack Hicks も同様に「消耗」という語に関して、“although attrition, the gradual death of the substantial world, is inevitable, it must constantly be resisted. Loss, death, and the destruction of dreams wait at every

Nagoya American Literature/Culture, No. 4, March 2016
© The Nagoya University American Literature/Culture Society, 2016

corner but can be held off by the imagination”（154）と述べる。すなわち、『ビッグ・サーの南軍将軍』においては、物質的な死に抗うかのように、精神的な死を延期しようとする試みが描かれているとの指摘である。こうした議論は、上述したように、物質主義的なアメリカ社会から逃避して、精神的解放を模索する文化的風潮をこの作品に読み込む試みと軌を一にするものといえよう。

20 世紀初頭から、ビッグ・サーに芸術家や作家が移住するようになり、やがて観光地化するとはいえ、1960 年代に至るまで、ビッグ・サーは、ボヘミアンな生活様式を可能にする楽園のイメージを植え付けられていたようである。[4] この作品が、物質主義的な社会から逃避し、精神的な「死」に抗うことのできるユートピアとして、ビッグ・サーを舞台としていることは、こうしたビッグ・サーのイメージを踏まえてのことであると考えられる。

また、ビッグ・サーが体現するウィルダネス（wilderness）が「自然」を求める人々の欲望を引き受けるものであることはすでに指摘されている。1960 年にウォレス・ステグナー（Wallace Stegner）は、ウィルダネスをアメリカ人の精神的支柱として捉えるエッセイを発表している。ステグナーは、物質文明から逃れることのできるウィルダネスが、まだこの地上のどこかに存在するのだという感情を保つためにも、ウィルダネスを保全することが必要であると論じている。つまり、ウィルダネスに使用価値を見出すというよりも、むしろ社会から逸脱することのできる場所として、ウィルダネスという概念を守ることを重視している（Stegner 175-176）。さらに、William Cronon によれば、ウィルダネスは、手つかずの自然を希求する人々の欲望を投影する鏡のようなものであるという（69）。すなわち、ウィルダネスとは文明の力が及んでいない手つかずの自然があるはずだという欲望を投影することができる場所として機能している。社会から隔絶した場所であり、原生自然の残る場所であるという幻想が、ウィルダネスという概念に付随しているのである。

『ビッグ・サーの南軍将軍』に関するこれまでの議論は、ビッグ・サーという場所のイメージと、さらにはウィルダネスの概念に関連する文明 / 自然の二元論を前提とした議論であるといえる。つまり、人里離れたビッグ・サーという場所は、いわばウィルダネスを体験できる場所であり、反順応主義的な人物であるリーが、物質主義的文明から逸脱することのできるユートピアであるとの解釈を先行研究から読み取ることができる。しかし、この作品におけるビッグ・サーという場所は、豊かな物質文明からの逃避先としての機能を果たしているにすぎないのだろうか。

文明 / 自然という二項対立を措定し、物質主義的文明という「悪」から逃

れ、「善」なるものである自然の中に救いを求めるという図式は、ロマン主義的な自然観の伝統に沿うものである。ロマン主義的な自然観に関しては、Jonathan Bate が“if one historicizes the idea of an ecological viewpoint – a respect for the earth and a skepticism as to the orthodoxy that economic growth and material production are the be-all and end-all of human society – one finds oneself squarely in the Romantic tradition”（9）と述べる。さらに Donald Worster は、ロマン主義的な自然観において、“nature had been abruptly exiled by the scientific mechanists from the realms of value, ethics, and beauty”（312）という思想があることを指摘する。同様に、Timothy Clark によれば、近年のエコロジーに関する思想は、自然に対するロマン主義的な概念を吸収したものであるとしたうえで、環境批評に関する議論はしばしば反工業的であり、「自然」を倫理的規範として捉える伝統があるという（16-18）。また、自然を根源的に持続可能で平和共存可能な場所として捉えるロマン主義的概念は、環境破壊の脅威によって補完されるものであると James C. McKusick は述べる（29）。このように、ロマン主義的自然観は、自然に対立する概念を措定することによって成立していることがうかがえる。

しかし、この作品におけるビッグ・サーは、必ずしも文明から逃避してくる人間を寛容的に受け入れ、癒しを与える存在ではない。つまり、アメリカ社会から逃れてくることのできる楽園としてビッグ・サーを捉えることは、文明 / 自然という二元論を前提とした幻想にすぎない。

本稿では、『ビッグ・サーの南軍将軍』におけるビッグ・サーでの生活に着目し、必ずしもビッグ・サーという場所が、物質主義的社会から逸脱することのできる楽園として描かれているわけではないことを検証する。これにより、この作品は、自然の中に逃避して反順応主義的な生き方を模索するリーの姿を描き出しているものの、ビッグ・サーを反順応主義者のユートピアとして捉えることには抵抗を示していることが明らかとなる。さらに、アメリカ社会から離れてウィルダネスを体験できるビッグ・サーではあるが、そこでの生活は荒廃したものであると同時に、ビッグ・サーも物質主義的なアメリカ社会から完全に隔絶した土地ではないことが作品中で示されている。一方で、最終的にウィルダネスに対する態度を留保していることをこの作品から読み取ることもできる。この作品における「荒野の戦い」の再演は、こうした葛藤を暗示するものであり、ウィルダネス幻想との戦いのメタファーとして機能する。つまり、この作品は、ウィルダネスを理想的なものとして捉える文明 / 自然の二元論の枠組みにとどまらず、ウィルダネスを一定の価値観で固定化することに抵抗す

るものとして解釈することが出来る。

2. 荒野からの呼び声——ビッグ・サーの理想と現実

この作品における主要人物リーは、自身の先祖に南軍将軍がいたという話に固執する男である。リーの先祖であるオーガスタスという男が南軍将軍であったことは、メロン家で代々語り継がれており、それを誇りに思っているという（*CG* 11）。[5] しかし、実際にオーガスタスという男が南軍に所属していたという記録は無く、その事実を知ったリーは狼狽し、彼の家系に南軍将軍がいたことを信じてくれとジェシーに懇願する（*CG* 15）。リーにとっては南軍将軍の話は疑いようのないものであり、メロン家の伝説として、神話化されている。

オーガスタスの伝説に固執するリーは、自身の先祖が戦ったであろう「荒野の戦い」をビッグ・サー、及びオークランド（Oakland）という土地で反復する。この作品の冒頭で、ビッグ・サーという地域が南北戦争の際に南部連合の一員として北部諸州に反旗を翻したという架空の歴史が提示される（*CG* 3）。すなわち、ビッグ・サーが南部連合であったとする語りによって、過去の南北戦争における戦いと、現代のビッグ・サーが接続され、リーにとっての「荒野の戦い」の主戦場がビッグ・サーであることが暗示される。

この小説の後半部分では、オーガスタスに関する架空の逸話が並置され、その物語において彼は、行方不明の兵卒として描かれる（*CG* 81, 85, 92）。しかし実際は戦場を逃げ回っており、最終的には北軍兵士を見つけるやいなや、死体のふりをすることで生き延びようとする（*CG* 97）。リーの信じていたような勇敢に戦ったオーガスタスのイメージとは対照的な彼の姿が滑稽に描かれる。

オーガスタスが戦いから逃げ回っていたのと同様に、リーの戦いも退却の色が濃い。しばらくジェシーの部屋の階下に住んでいたリーは、家賃が払えずオークランドに引っ越す。そこでの「戦い」が以下のように描写される。

> Lee Mellon moved out of his room because he couldn't pay the rent and went over and lay siege to Oakland. It was a rather impoverished siege that went on for months and was marked by only one offensive manoeuver, a daring cavalry attack on the Pacific Gas and Electric Company.（*CG* 24）

リーは「オークランド包囲戦」を展開し、Pacific Gas and Electric Company に「攻撃」を仕掛け、主要ガス管までトンネルを掘り、そこからガスを盗む（*CG*

24)。ここで、「包囲」(siege)、「攻撃的作戦行動」(offensive manoeuver)、「騎兵攻撃」(cavalry attack)といった語が使用されていることからも、リーの行動と戦争のイメージとを重ね合わせて提示していることは明らかである。しかし、やがて資金が底を尽いて家賃が払えなくなったリーは、ビッグ・サーへと退散することとなる。

ビッグ・サーへと撤退したリーは、ジェシーへの手紙の中でビッグ・サーの素晴らしさを謳い、彼をその場所へと誘い込む。ジェシーが興味を示すと、"can't you smell that sweet sagebrush-by-the-ocean air of Big Sur?"(*CG* 32)と煽り、しきりにビッグ・サーを勧めるのである。リーとジェシーの往復書簡の中で、リーはジェシーを彼の小屋へと呼び込むために、ビッグ・サーの素晴らしさを説く。

> Why don't come down here? I haven't any clothes on, and I just saw a whale. There's plenty of room for everybody. . . . This morning I saw a coyote walking through the sagebrush right at the very edge of the ocean – next stop China. The coyote was acting like he was in New Mexico or Wyoming, except that there were whales passing below. . . . Come down to Big Sur and let your soul have some room to get outside its marrow. (*CG* 32-33)

動物を見ることができ、さらに都会では得られないような解放感を得られることを仄めかすリーの手紙は、まるでビッグ・サーへ観光客を呼び込む宣伝文句のようである。コヨーテに関する記述では、ニュー・メキシコ州やワイオミング州の名が挙げられていることから、砂漠地帯やイエローストーン国立公園を喚起する。すなわち、社会から隔てられたウィルダネスの中に居るかのようなコヨーテの姿を提示することで、ビッグ・サーがウィルダネスに近い環境であることを暗示する。そして、ビッグ・サーを訪れて、魂を解放してはどうかとジェシーに迫る。

ビッグ・サーでの生活に関してリーは、電気は無いがランタンがあり、ストーヴもあると説明するなど、快適な側面を強調する(*CG* 34, 36)。さらに、生活費はどうするのかと問うジェシーに対して、"I've got a garden that grows all year around! A 30.30 Winchester for deer, a .22 for rabbits and quail"(*CG* 38)と答え、自給自足が可能であることを示す。リーが謳うビッグ・サーは、物質主義的な社会から離れて生きることを可能にする楽園であり、リー曰く、"the

greatest place in the world”（*CG* 37）なのである。このように、リーの手紙は、ウィルダネスにおいて都市とは異なる満ち足りた生活へとジェシーをいざなう呼び声としての機能を果たす。

しかし、リーの謳い文句とは対照的に、ビッグ・サーでの生活は困窮を極めていることが明らかとなる。そこでは、貧しい食糧事情が描かれ、ユートピアとは程遠いイメージが喚起される。

ビッグ・サーでの食事については、“the dinner we had that evening was not very good. How could it be when we were reduced to eating food that the cats would not touch? We had no money to buy anything edible and no prospects of getting any. We were just hanging on”（*CG* 41）とあるように、猫も口をつけないような食事を余儀なくされていることがほのめかされる。そして、為す術もなくただ空腹に耐えていることがうかがえる。自給自足が可能であると謳われたビッグ・サーでの生活は、実のところ金銭なしでは食料を賄えない状態にあったのである。

さらに、リーの手紙によれば、狩猟によって肉が手に入ることが示唆されているものの、弾丸は乏しい上に、リーの狩猟の腕も信頼が置けるものではない。“He [Lee] shot a doe in the ass the doe limped off into the lilac bushes and got away”（*CG* 42）とあるように、狙った雌鹿には逃げられてしまう。また、その翌日、残り二発の弾丸を携えて山に入っていったリーは、弾丸を使い果たし、何も獲ることなく戻ってくる（*CG* 43）。

このような食事に関する描写から、ビッグ・サーでの「戦い」が、食糧事情の貧しい消耗戦であることが暗示されると同時に、戦争のイメージを食事と直接的に結びつける描写も見受けられる。リーが狩りに失敗して戻った日の夜の食事に関しては、再び“not very good”（*CG* 44）と記述され、さらには“to make meal a perfect gastronomical Hiroshima, we had some of Lee Mellon’s bread for dessert. His bread fits perfectly the description of hardtack served to the soldiers of the Civil War”（*CG* 44）との描写がなされる。リーが作る堅パン——サンフランシスコ（San Francisco）で購入した引き割り麦（cracked wheat）を水と混ぜて加工したもので、後に猫も齧ることができないと描写される（*CG* 54）——がデザートとして出されるが、ここで、“gastronomical Hiroshima”という表現が使用される。これにより、いかにその堅パンが酷いものであるかが強調されているが、ここで重要なのは「ヒロシマ」という語が使用されることで、凄惨な戦争のイメージを喚起し、ビッグ・サーでの生活は、リーにとっての「戦い」であることを読者に再認識させる効果を持つことである。さらに

そのパンが南北戦争の兵士の糧食にたとえられていることからも、戦時下の乏しい食糧事情を彷彿とさせ、ビッグ・サーでの「戦い」が「消耗戦」の様相を呈していることが示される。

都市での「戦い」に敗北し、ビッグ・サーへと逃げ込んだリーではあるが、彼の手紙は、逃避先であるウィルダネスを理想的なユートピアとして喧伝する。都市生活から逃れて、自給自足の生活を送ることができる場所として、ウィルダネスを称揚する態度を、リーの手紙から読み取ることができる。しかし、実際のビッグ・サーでの生活は理想的なものとは程遠い。荒野からの呼び声に誘われてビッグ・サーにやってきたジェシーが目撃するのは、リーの謳い文句とはかけ離れたビッグ・サーでの「消耗戦」なのである。

3. 文明の侵入——エリザベスとジョンストン

ビッグ・サーは自給自足が可能な楽園ではなく、そこでの生活は困窮を極めている。この作品におけるビッグ・サーは、物質主義的な社会から隔絶した場所であるかに見えるが、反順応主義者のユートピアとして描かれているわけではない。そこは、都市社会における価値観と、荒野での生活が接触する場所である。ビッグ・サーを訪れるエリザベス（Elizabeth）とジョンストン・ウェイド（Johnston Wade）という二人の人物に焦点を当てることで、物質主義的な社会がウィルダネスに侵入してくる様が描かれていることが明らかとなる。リーの手紙の中で、社会から逸脱して自給自足が可能であるとされたビッグ・サーではあるが、実際は、金銭的に余裕のある者が訪れて余暇を楽しむ場所としての性質を有している。つまり、ビッグ・サーという場所は、社会から隔絶したユートピアとしては描かれてはいない。

ビッグ・サーは、資本主義社会で金銭を稼いだ者が、束の間のウィルダネス滞在を楽しむための場所としての側面を有している。資本主義社会においては、何らかの商品を貨幣と交換し、自身の利潤を追求する。いわば、リーが理想とするウィルダネスの生活とは対極に位置する社会制度として規定することが出来よう。そうした社会において金銭を稼いだ者が、ビッグ・サーでの余暇を過ごす。それを象徴的に表すのがエリザベスの生活である。リーの友人であるエリザベスは、1 年のうち 3 か月をロサンゼルス（Los Angeles）で高級娼婦（a hundred-dollar call girl）として過ごし、残りの 9 か月を働かずに過ごせるほどのまとまった金額をロサンゼルスで稼いでくる。そして、ビッグ・サーに戻り、髪を伸ばして瞑想して過ごすという、あたかもヒッピーを模したような生活を送る（*CG* 56-57）。

エリザベスの生活様式に関して、“she performed a fantastic change and did it with great skill”（*CG* 56）と描写されるように、彼女が対照的な二つの生活を営んでいることが示唆される。都市部に出稼ぎに行くエリザベスの職業は娼婦であるが、これは彼女が自身の「性」を売り物にしていることを示す。Jean Baudrillard が、消費社会においては「性そのものが消費対象となる」（144）と述べるように、エリザベスは、消費社会において「性」を商品として販売する商人としての側面を持つのである。一方で、ビッグ・サーにおけるエリザベスと彼女の子どもたちの生活は、“they live in the lonely reaches of the world”（*CG* 56）と表現され、社会から遠く隔絶した場所での慎ましい生活を読者に喚起する。このように、ロサンゼルスという都市を離れ、精神的に満ち足りた生活を送るために、ビッグ・サーにやってくるエリザベスの様子が描写される。このようなエリザベスの生活様式は、ビッグ・サーにおいて満ち足りた生活を送るために、一旦は資本主義社会において金銭を稼ぐことが必要となることを暗示する。つまり、エリザベスとリーの間で決定的に異なっているのは、社会の中で金銭を得て、余暇としてのウィルダネス体験を楽しんでいるか否かである。

さらに、資本主義社会での成功者を象徴するジョンストン・ウェイドという人物が、ビッグ・サーに侵入する。「チビでデブでハゲであることを除けば、映画 *High Sierra* に登場する Humphrey Bogart のようだ」と形容され、リーからは Roy Earle と呼ばれるこの男は、「罪深きビジネスマン」（a guilty businessman）であり、金が詰め込まれたブリーフケースを携えているとされる（*CG* 85）。この男は、Johnston Wade Insurance Company の社長であり、自分の金目当ての家族にうんざりしてビッグ・サーへと逃げ込んできたと述べる。

> My wife wants to put me in the nut-house because I bought a new car: my Bentley Bomb. She wants all my money and so does my son who goes to Stanford and my daughter who goes to Mills College. . . . I run the Johnston Wade Insurance Company in San Jose. I am Johnston Wade. Just because I'm fifty-three years old and want a sports car, they think they're going to lock me up, put me away.（*CG* 88）

彼の息子たちの学費を支払わねばならないにもかかわらず、高級スポーツカーを買ったために、妻からは気が狂っていると思われ、精神病院に入れられそうになったジョンストンは、そうした煩わしい家族関係から逃避してきた男であ

る。

また、ジョンストンに関する描写においても、戦争を彷彿とさせる描写が見受けられる。自身の出自を述べるジョンストンは、“as if he were a prisoner of war, giving his name, rank and serial number”（*CG* 89）と、「戦争捕虜」の比喩を用いて描写される。ここで、資本主義社会からビッグ・サーに侵入し、ウィルダネスに捕らえられた捕虜としてのイメージがジョンストンに付与される。さらに、ビッグ・サーに来てからのジョンストンは気が狂っているとされ、海岸で小火騒ぎを引き起こす（*CG* 94）。そのため彼は、リーによって丸太に縛り付けられることとなるが、その丸太を引きずってジェシーの前に現れた彼の姿は、“it was horrible”（*CG* 102）と形容される。

これに加えて、“I [Jesse] expected to see a Confederate invasion of Monterey, California, drums and banners going by on Highway I, but all I saw was Roy Earle [Johnston], free of his wife, sitting by the hole of kitchen wall, beating on an overturned washtub”（*CG* 106）とあるように、ジョンストンが叩く金盥の音が、ジェシーにとっては侵入してきた南軍の軍鼓の音に聞こえるという。この時、ジョンストンの座っている場所が、台所の壁に空いた穴のそばであることを見逃すことはできない。台所の壁の穴に関しては、“the wind roared like the Confederate army through the hole in the kitchen wall: Wilderness – thousands of soldiers taking up miles of the countryside – Wilderness!”（*CG* 79）と描写されるように、ここでも荒野を進軍する南軍のイメージを読者に喚起する。先日まで捕虜として丸太につながれていたジョンストンが、どういうわけか鎖を解いて自由になり、金盥という軍鼓を叩きながら、友軍を引き連れてウィルダネスに侵入してくるかのようなイメージをこれらの描写から読み取ることができる。また、“the hole in the kitchen wall, his [Lee's] inevitable Wilderness”（*CG* 75）とあるように、リーにとってもまた台所の壁の穴はウィルダネスとの接触点であることが暗示されている。このことから、ジョンストンとリーの想像上の「荒野の戦い」が、台所の壁の穴というモチーフを通して想起される。

しかし、ウィルダネスに侵入したジョンストンはやがて、コンプトン（Compton）で顧客に会うためにビッグ・サーを去ることになる（*CG* 109）。資本主義社会からビッグ・サーにやってきたジョンストンではあるが、彼のウィルダネス体験は一時的なものであり、いわば観光客として「荒野の戦い」を経験したに過ぎない。ウィルダネスに侵入したジョンストンは、再び資本主義社会へと戻っていくのである。

このように、エリザベスとジョンストンのウィルダネス体験は一時的なものにとどまっている。どちらの生活に軸足を置いているかに関して、両者の間に程度の差はあれ、両者とも完全に社会から切り離されてビッグ・サーで生活を送ることは無い。このことから、ウィルダネスを象徴するビッグ・サーも資本主義社会の侵入に絶えずさらされており、リーの謳うようなユートピアはすでに存在しないことが明らかとなる。

4. 増殖する終章——固定化されることへの抵抗

反順応主義者のユートピアとしてのビッグ・サーはもはや存在しない。社会から逸脱して、自給自足の生活を送ることができると謳われたウィルダネスにおいても、文明の力がおよび、金銭が無ければ満ち足りた生活を送ることができないということが、この作品を通して示唆される。このことは、困窮したリーが、煙草の吸殻を求めてハイウェイを歩き回る“The Rites of Tobacco”という章において顕著である。どこまでいっても一本の煙草を見つけることができずに戻ってきたリーを見て、語り手は“the end of an American dream”（*CG* 73）と述べる。自らの努力によって成功をつかみ取ることが出来るとされるアメリカン・ドリームではあるが、この作品は、そのような理想の不可能性が示唆されており、いわゆる“rags-to-riches”の物語ではない。この作品におけるアメリカン・ドリームが具体的に何を意味するのかは明確ではないものの、リーが理想とした、社会から逸脱して自給自足する生活は、すでに不可能なものになっていることを示唆しているのではないだろうか。すなわち、安易なウィルダネス体験を提供する場所となったビッグ・サーは、資本主義社会で金銭を得た者たちが余暇を過ごす場所としての役割を果たすのである。

Roderick Frazier Nash が、“wilderness appealed to those bored or disgusted with man and his works”（47）と述べるように、社会での人間関係や仕事にうんざりした人々にとって、一時的にせよ解放される場所としてウィルダネスは魅力的に映る。しかし、『ビッグ・サーの南軍将軍』の 2 年前に出版された Jack Kerouac の自伝的小説 *Big Sur* において、「1960 年代においては、Hemingway の“Big Two-Hearted River”を希求することが出来ない」（45）と述べられているように、観光客の増加などにより、ウィルダネスは資本主義社会の一部となりつつあり、自然の中に癒しを求めるというロマン主義的な自然体験は不可能であることが示唆されている。これと同様に、『ビッグ・サーの南軍将軍』においても、ウィルダネスへの憧れは幻想であることが示され、資本主義社会の侵入が描かれている。

しかし、この作品の最終章におけるウィルダネスに対する態度は曖昧である。この作品を通して、リーの謳う自給自足の生活が不可能であることが示され、ビッグ・サーという場所は、資本主義社会で金銭を得た者が余暇を過ごすための簡易的なウィルダネスであることが示唆される。その一方で、6 パターンに別れたエンディングの一つにおいて、ジョンストンの現金が、太平洋に撒かれる場面が描かれる。"'All this money ever did was bring me here,' Roy Earle volunteered as the hundred dollar bills fluttered like birds onto the sea"（*CG* 116）と描写されるように、金銭を稼ぐことでビッグ・サーに来ることが出来たが、その金銭も必要が無くなったために海に投げ捨てていることがうかがえる。すなわち、資本主義社会からの逃避の果てに、物質主義から逸脱したユートピアを発見したのだと言わんばかりの行動である。

このように、この作品を通して、ウィルダネスが楽園であるという幻想を回避しようとしたブローティガンが、最終章において楽園を発見したかのようなエピソードを挿入している。しかし、これは一つのエンディングに過ぎない。"Then there are more and more endings: the sixth, the 53rd, 131st, the 9,435th ending, ending going faster and faster, more and more endings, faster and faster until this book is having 186,000 endings per second"（*CG* 116）とあるように、エンディングのパターンは無限に増殖し、加速し、最終的には光速で飛び去って行く。Edward Halsey Foster が、このエンディングに関して"there are seemingly unlimited possibilities or endings for any given moment"（45）と指摘するように、この作品は意味の固定化を嫌い、様々な読みの可能性を示唆していると考えられる。すなわち、ウィルダネスに対する態度を留保することで、ブローティガンは、一つの意味に固定されることのないウィルダネスを描き出そうとしているのではなかろうか。

ブローティガンは、物質主義的な社会から逃れて、精神を解放できる楽園としてのウィルダネスは幻想であること、またウィルダネスが資本主義社会の侵入を受けており、安易なウィルダネス体験を提供する場所になっていることを、『ビッグ・サーの南軍将軍』において描き出した。一方で、この作品は、ウィルダネスに何らかの価値を見出すことそのものが、人間の文化的価値観によって意味づけられたものであることも同時に示唆している。そうした姿勢を顕著に表すのが、断片化して増殖するエンディングであり、そこから読み取ることのできる、ウィルダネスに対する態度の留保である。すなわち、この作品における「荒野の戦い」は、ウィルダネスを意味づけることに対する葛藤を暗示するものであり、そうした意味において、人間中心主義的な自然観から逸脱しよ

うとする姿勢を『ビッグ・サーの南軍将軍』は提示しているのである。

註

1　Tomi Kay Lussier によれば、ビッグ・サーには具体的な境界が無いものの、北はカーメル（Carmel）から南はサンシメオン（San Simeon）のあたりまで、そしてサンタルシア山脈（Santa Lucia Mountains）の西側から太平洋沿岸に広がる地域を指すとされる（3-4）。また、Rosalind Sharpe Wall によれば、州道 1 号線が通っているにもかかわらず、食堂やガソリンスタンドはほとんどなく、町と呼べるものも存在しない孤立した地域であるとされる（2）。

2　Malley は“despite the predominantly comic tone of *Confederate General*. . . . Brautigan may be said to be pessimistic or at least nostalgic”（112）と述べる。また Tanner は、Malley と同様にブローティガンの作品における喜劇性を指摘しつつ、“there is a pervasive sense of loss, desolation and death in it which amounts to an implicit formulation of an attitude towards contemporary America”（406）と述べる。

3　1960 年代のアメリカにおいて、物質主義的な社会を拒絶する人々が存在したことは、David Farber と Beth Bailey が指摘している（55）。また、Joseph Heath と Andrew Potter によれば、60 年代の人々は、本能的欲求を抑圧した上に成り立つ「文明」から逃避するために、従来の文化を拒絶したとされる（40）。さらに、Herbert Marcuse は、“Political Preface 1966 to *Eros and Civilization*”において、物質的に豊かな社会を拒絶することは人類をさらに発展させることになると主張し、簡素で「自然」な生活を求めることに可能性を見出している（231）。このような文化的風潮の中で、ブローティガンは若者たちの間で“cult hero”（Malley 13）として位置付けられた。

4　ビッグ・サーに関する歴史については Kevin Starr を参照。1950 年代には、ビートなどの前衛的作家が、「伝統からの逃避」（an escape from the conventional）を象徴する場所としてビッグ・サーを捉えており、60 年代においてもビッグ・サーという土地の気風が「非体制的な価値観の苗床」（a seedbed of alternative value）であったと Starr は指摘する（328, 347）。

5　『ビッグ・サーの南軍将軍』からの引証に際して、以下書名はすべて *CG* と略記する。

引用文献

Bate, Jonathan. *Romantic Ecology: Wordsworth and the Environmental Tradition*. London:

Routledge, 1991. Print.

Baudrillard, Jean. *The Consumer Society: Myths and Structures*. 1970. Trans. Chris Turner. London: Sage, 2012. Print.

Brautigan, Richard. *A Confederate General from Big Sur*. 1964. London: Picador, 1973. Print.

Chénetier, Marc. *Richard Brautigan*. New York: Methuen, 1983. Print.

Clark, Timothy. *The Cambridge Introduction to Literature and the Environment*. Cambridge: Cambridge UP, 2011. Print.

Cronon, William. "The Trouble with Wilderness; Or, Getting Back to the Wrong Nature." *Uncommon Ground: Rethinking the Human Place in Nature*. Ed. William Cronon. New York: Norton, 1996. 69-90. Print.

Farber, David, and Beth Bailey. *The Columbia Guide to America in the 1960s*. New York: Columbia UP, 2001. Print.

Foster, Edward Halsey. *Richard Brautigan*. Boston: Twayne, 1983. Print.

Heath, Joseph, and Andrew Potter. *The Rebel Sell: How the Counterculture Became Consumer Culture*. 2005. West Sussex: Capstone. 2006. Print.

Hicks, Jack. *In the Singer's Temple*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1981. Print.

Kerouac, Jack. *Big Sur*. 1962. New York: Penguin, 1992. Print.

Locklin, Gerald, and Charles Stetler. "Some Observations on *A Confederate General from Big Sur*." *Critique* 13.2 (1971): 72-82. *ProQuest*. Web. 30 Sep. 2013.

Lussier, Tomi Kay. *Big Sur: A Complete History & Guide*. Marina: Big Sur, 1979. Print.

Malley, Terence. *Richard Brautigan*. New York: Warner, 1972. Print.

Marcuse, Herbert. "Political Preface 1966 to *Eros and Civilization*." *The Continental Philosophy Reader*. Ed. Richard Kearney and Mara Rainwater. New York: Routledge, 1996. 227-234. Print.

McKusick, James C. *Green Writing: Romanticism and Ecology*. New York: Palgrave, 2010. Print.

Nash, Roderick Frazier. *Wilderness and the American Mind*. 1967. New Haven: Yale UP, 2014. Print.

Starr, Kevin. *Golden Dreams: California in an Age of Abundance, 1950-1963*. Oxford: Oxford UP, 2009. Print.

Stegner, Wallace. "The Meaning of Wilderness for American Civilization." *American Environmentalism: Reading in Conservation History*. Ed. Roderick Frazier Nash. New York: McGraw-Hill, 1990. 175-180. Print.

Tanner, Tony. *City of Words: American Fiction 1950-1970*. New York: Harper and Row, 1971. Print.

Wall, Rosalind Sharpe. *Big Sur: A Wild Coast & Lonely*. San Carlos: Wide World, 1989. Print.

Worster, Donald. *Nature's Economy: A History of Ecological Ideas*. 1977. New York: Cambridge UP, 1995. Print.